九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

リカードの資本蓄積理論における「機械論」の意義

岡，茂男

https://doi.org/10.15017/4355410

出版情報：經濟學研究. 15 (3/4), pp.91-117, 1950-03-25. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

リカードの資本蓄積理論における「機械論」の意義

岡　茂　男

目　次

はしがき
一　「原理」初版の蓄積理論
二　「原理」第三版における修正
　1　「價値論」の修正
　2　「機械論」における改説
三　「原理」第三版を契機とするリカード蓄積理論の発展

はしがき

蓄積論史上、リカードの地位は、正当に評價されていない。リカードの学説史上の意義は、殆どその價値論及び地代論についてのみ論ぜられ、蓄積理論については、アダム・スミスの單なるエピゴーネンとしてか、或いは寧ろスミスより一

歩後退した論者として簡單にかたづけられているのが普通である。從つて彼の蓄積理論をまともに取上げ、その発展的意義を問題にした文献は、まことに少い。なるほどリカードが、資本の再生産にとつて不可缺な要素となる生産手段を無視する一連のドグマを、スミスより無批判に継承したという点に関するかぎりでは、かかる評價も正しいであろう。しかし乍らマニュファクチューア時代のスミスと産業革命激動期のリカードとを、安易にも同日に談ずることには警戒を要する。リカードが、その「原理」第三版（一八二一年）において、右のスミスの謬れる遺産の一部を、明確に否定し、その他の点についても蓄積理論に劃期的な発展の端緒を齎したという事実は、わけても注目しなければならぬ点である。彼は原理三版の出版に際して、蓄積論に関する諸章に大々的に手を入れる考えをもつていたらしい。友人マカロツク宛に次の様な手紙を送つている。（一八二一年四月二十五日附書簡）

「私の以前の著作における蓄積に関する章を書き直す事が、阻げられはしまいかと案じています。それは今現に第三版を刷る爲に印刷屋の手に廻つています。併しもしも印刷屋があの章を組みにかかるまでに、私にそれを改善するに充分な時間と能力とがあることが分つたら、私は必ずこれを試みるでしよう」[1]と。（傍点は岡・以下同様）

ここにリカードが、自己の能力と余裕とを問題にしていることを考えるならば、その修正意図が決して單純なものではなく、相当重要なものであつたことが推察されよう。残念なことには、彼の固い決意にも拘らず、蓄積に関する章（第六章及び第二十一章）は、遂に修正されず、ただ「價値論」（第一章）の修正と「機械論」（第三十一章）の挿入だけに終つてしまつた。ところがこの新章「機械論」において、彼の蓄積論修正の企図は、図らずも一部実現される結果となつた

のである。かかる事実を看過するときには、リカード蓄積理論の学説史的意義を、正当に評價することは不可能になる。多くの論者は、この重要な契機を見おとしてしまつた。そして專ら批判の対象を、幾多の弱点を含む「原理」初版（一八一七年）の蓄積理論に求めているのである。例えば、ローザ・ルクセンブルグは、リカードを以て、「スミスの謬れる價格分析を……無頓着に受け入れた」所の單なる追随者とみなすばかりでなく、彼の機械論を問題にし乍らも、單に彼の主張が弁解的であることのみを非難して、機械論に含まれている重要な発展的意義には少しも氣付いていない。[2] アモンやツガンとなると、かくも重要な機械論については、殆ど触れてもいない有様である。（註一）機械論の革新的意義を認めている若干の論者の場合にも、その蓄積理論上においてもつ意義の重大さを、正当に評價することが出來ないでいる。例えばベルクマン、ハインリッヒ、グロースマン等がそうである。（註二）

このように不当な、そして一面的な評價しか受けなかつたリカードの蓄積理論を、前述の如き重要な発展を含む第三版の見地から再検討し、蓄積論史上彼の占むべき正当な地位を確定することが必要である。勿論紙数の限られたこのような小論において、リカードの蓄積理論の全般を余さず詳論することは不可能であるから、ここではその枢要な一点にのみ論述を限定するよりほかはない。即ちリカードは、スミスより如何なる点で蓄積理論を発展せしめたか、具体的にいえば、彼が「原理」初版において、不変資本を看過する所の致命的ドグマをスミスから全面的に継承しながらも同時に、不変資本の價値形成上の役割を、スミスより以上に明確に認識したが故に、このことが発展への正しき契機となつて、やがて第三版機械論の革新的な改説においては、投下不変資本の逓增傾向を発見し、宿命的ドグマの一角を明確に克服するに至る

リカード蓄積理論の発展過程を、以下に追求してみたいと思う。

(1) Ricardo, D.; Letters of Ricardo to McCulloch, edited by J. H. Hollander, 1895, p.94.

(2) Rosa Luxemburg; Die Akkumulation des Kapitals, 1923, S.29, S.148.

(註一) リカードの研究家を以て有名なアモンですら、機械論を無視している。(Alfred Amonn; Ricardo als Begründer der theoretischen Nationalökonomie, 1924.) (戸田氏もこの点を指摘されている。「機械の経済学」五五頁参照。) 「近代恐慌理論の父」ともいわれるツガンも「リカードは、資本蓄積過程を殆ど(スミスと……同)同じように述べている」と指摘するのみで、機械論には全く触れていない。(Tougan-Baranowsky; Les Crises industrielles en Angleterre, 1913, p.194; 鍵本博訳「英國恐慌史論」一九五—一九六頁参照)

(註二) ベルクマンは、機械論の重要性を単に指摘するだけで、具体的に如何に重要であるかを論じていない。(Eugen Von Bergman; Geschichte der Nationalökonomischen Krisentheorie, 1895; 豊崎・三谷訳「國民経済学的恐慌学説史論」九六—九八頁参照。) リカードが、流動資本の固定資本化によって失業の必然性を主張した事実を指摘し乍ら、その重大な意義に氣付いていないのはハインリッヒである。(Walter Heinrich; Grundlagen einer universalistischen Krisenlehre, 1928, S.8—9.) グロースマンは、「マルクスは何も機械による労働の遊離を今更ら『証明する』までもなかつた……マルクスは単にリカードの言葉を受け入れているにすぎない」とまでリカードを過大に評價し乍ら、その蓄積論史上の劃期的意義を全く看過している。(Henryk Grossman; Das Akkumulations-und Zusammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems, 1929, S.171, S.255—256.)

一　「原理」初版の蓄積理論

再生産における不変資本の意義を沒却し、社会的総生産物を総收入と等置して、それを三つの收入部分に解消させるドグマは、アダム・スミスによつて経済学へ導入され、そのまま古典派経済学を誤まらしめる宿命的な躓きの石となつてしまつた。リカードも亦このドグマを無批判に継承した。即ち、「凡ゆる國の土地と労働の総生産物は、三つの部分に分割される。その一部分は労賃、他の部分は利潤、そして今一つの部分は地代に充てられる」(註一)と。更にこの命題を裏返えす時には、必然に第二のドグマに轉化する。即ち、蓄積された資本は、悉く労働の雇傭の爲にのみ労賃として消費されるとなす見解が、これである。このドグマも亦リカードによつて、「資本の蓄積即ち労働雇傭手段の蓄積」、生産的消費即ち労賃への支出という形で、その蓄積理論に持ち込まれるに至つた。(註二)また生産手段の補塡が、再生産の不可缺な條件である事実を無視する見解からは、更に社会的総生産物を消費資料たる必需品と奢侈品にのみ還元し、從つて生産部門の分割においても、自然的に農業と工業とへ分類するか、又は單に消費資料生産部門(必需品生産と奢侈品生産)だけを取上げて、生産手段生産部門を抽象するといつた諸々の誤謬が、産み出されている。

(註一) Ricardo, D.; Principles of political Economy and Taxation, 1817, 1st. ed., p.492, p.582, etc.　リカードは、地代を商品價値の決定に参加しえないものと考えているから(ibid., p.59, p.67, p.67, p.330.)結局この「分割の原理」は、商品の総價値を労賃と利潤の二部分に解消することになる。(ibid., p.117, pp.303—304, p.345, etc.)

（註二）「資本に比例して、より多くの労働者が雇傭される爲に労賃は騰貴するであろう。」(ibid., p.98, p.141.)

しかしリカードは、万事をスミスに従つたのではない。何よりもまず彼が、スミスの放棄せる投下労働の價値原理を、資本制生産社会にも妥当せしめ、嚴密なる價値の分解理論を、統一的且つ体系的に貫徹せしめたことは、彼の偉大な功績であつた。（註三）それに加えてリカードは、價値形成過程における不変資本の役割を正しく認識し、不変資本は、何等新しき價値を創造せず、ただその磨消部分の價値だけが新しき商品の上に移されるということを明かにしたのである。(Ricardo; Principles, 1817, pp. 16—17.) このことは、第三版における発展を誘導した胚珠ともなる見解であつたという意味において、われわれは特に重視しなければならない。何故なら、さきに商品價値の分解に当つて抹殺されていた不変資本の價値が、ここでは商品價値の形成に参加せしめられているからである。しかしながら、リカードの不変資本に対する認識は、決して確乎たるものではなかつたのである。成程リカードは、利潤の本質については相当徹底した理解を持つのであるから、本能的には價値増殖の見地に基く不変資本と可変資本との区別を感知していたに相違あるまい。併し彼が実際に規定した唯一の分類は、資本流通の見地からなされる固定資本と流動資本の区別に過ぎなかつた。このことから不変資本に関する正しい理解が阻まれてくる。即ち原料は、流通上の性質からすれば、可変資本たる労働力と共に流動資本に属すべきものであるが、他方價値増殖上の機能からいえば、固定資本たる労働手段と共に不変資本たるべきものであるから。かくてリカードは、價値形成過程において原料の價値移轉を問題にする場合には、常に固定資本の存在を無視し、逆に後者の價値移轉を論ずる場合には、常に前者の存在を看過し、結局この両者が同時に價値形成に参加する場合を、どこにも明言し

ていない。(註四) このようにリカードが、不変資本なる範疇を明確に理解しえなかつたことは、後の改説に当つて、前述の如きドグマを完全に克服することを妨げた最後の致命的障碍ともなつている。(第三項参照)

(註三) Ricardo; Principles, 1817, pp.5—7, pp.16—17, p.24, スミスが支配労働説をとり、構成理論に轉じた点については、Smith, A.; Wealth of Nations, BK. I, Ch. W, Cannan's ed., Vol. I, pp.50—51. を参照。

(註四) 原料の價値移轉を認めている場合(Principles, p.19, p.90, p.107, p.126, p.129, p.136, p.199, p.214, p.218, p.313, p.324, p.402, p.454, etc.) には、常に固定資本の價値移轉を、無視している。逆の場合については、ibid., p.9, Ch. I., p.263, p.273, etc. を参照。なお「リカードの定義の中には、原料を容れるべき余地がない」ことになる。(Jan St. Lewinski; Founders of Political Economy, 1922, p.122.) リカードが、辛くも達し得た正しい見解は次の如き程度に過ぎない。「貨幣の形においては、この資本は何等の利潤を生産しないが、貨幣と交換されうべき原料、機械及び食物の形においては、収入を生じ國の富と資源を増大する」(ibid., p.313; cf. p.272) と。又ある場合には生産手段の價値移轉を忘却している。(ibid., p.378, pp.384—385, p.393.) キャナンは、このことの理由を、当時固定資本の貧弱な農業資本が論議の的になつた事実に求めている。(Cannan, E.; Theories of Production and Distribution, 1922, p.112.) 尚以上の諸点については、資本論第二卷、高畠訳、一八〇頁参照。

次にリカードの継承した前述の基本的ドグマが、如何に彼の優れた見解又は謬れる見地と結びつきつゝ、彼の蓄積理論を如何に混乱せしめているかを、追求してみよう。

リカードは、資本制生産の本質を洞察したすぐれた見地から、蓄積の動機を高き利潤に求めている。蓄積は「利潤の増大」によつて促進せられる。(ibid., p.136, p.401, p.492, etc.) 併し同時に蓄積は生産的消費を意味するから、蓄積され

た資本は、「その消費の総價値を、利潤と共に再生産する」(ibid., p. 308; pp. 492-493) が如き生産的労働を、出來るだけ多く雇傭する爲に用いなければならない。從つて「資本の蓄積は、如何なる場合でも労働の生産力によつて決定される」(ibid., p.98) ことになる。だがかかる價値增殖の契機を余りにも重視し强調したリカードは、蓄積資本は悉く生産的労働の雇傭にのみ投ぜられるものとみるに至つた。ここでは、利潤追求の價値視点が極端化されてをり、しかもこのことが第二のドグマを肯定し溫存せしめる强力な支柱となつていることは、後述の如く重大な点である。(第三項一一四頁參照)

然るに他方では、これとは全く反対にリカードは、富即ち單なる使用價値たる「生産物量の增大」に蓄積の動機を求め、蓄積は「商品の低廉より生ずる支出の減少」によつて促進せしめられると主張している。(註五) この場合の生産は、利潤の獲得の爲に行われる價値の生産ではなくして、「他の諸生産物を獲得するという目的を達成する爲に」行われる所の使用價値の生産に過ぎない。人は自己の欲する「ある他の生産物を購買する爲にのみ販賣する。」(ibid., p.400.) しかも人間の欲望は、必需品については胃の腑の大さにより制限されるが、奢侈品については無限である。[1] (ibid., pp. 405—406) 從つて「需要は、生産によつてのみ制限せられる。」(ibid., p.399) これは正しくセイの販路說 (Theorie des Débouchés) と合致する。(註六) しかもかかる自然的絕対的見地に立つリカードの見解が、前述の社会的歷史的價値視点と矛盾するのみならず、更に「資本の蓄積=労賃の增加」となす前述の謬れる命題によつて「科学的支持を受けている」[2] ことも亦、見逃すことのできぬ点である。

リカードは、之等二つの相矛盾する觀点の間を絕えず動搖しているが、寧ろ自然的見地にヨリ强く固執しているかの如

くである。就中注目すべきは、この自然的見地と結びついて、所謂「機械補償説」(Kompensationstheorie) なる新しきドグマが、築き上げられていることである。「機械が大いに改良された場合には、資本は他の用途に向けて解放され、同時にこの用途に必要な労働も亦解放される」[3] 「従つて労働に対しては従來と同一の需要があり、労賃は少しも下落しないであろう」[4] とリカードはいう。この主張は、明かに彼の自然的絶対的資本観と、追加資本を労賃にのみ解消する見解との交錯から成る産物である。彼は資本を生産物自体と同一視し、原始的社会においてすら資本の存在を認めている。(ibid. pp. 93—94, p. 387; pp. 16—17.) 従つていう所の解放された流動資本とは、労働者の生活必需品にほかならない。かくて解雇された労働者と、彼等の消費に予定されていた必需品とが、今や必然的に結びつくというのである。成程必需品は解放される。だがこの必需品は、最早や解雇された労働に対して、資本としてではなく、單なる商品として市場に存在しているに過ぎないのに。[5] つまり彼の誤謬は、資本の一般的形態たる「貨幣資本」なる範疇を認識し得なかつた点にある。彼にとつては、貨幣は資本ではなくて單なるベールにしか過ぎない。即ち「生産物は生産物によつて購買され、貨幣は單に交換の媒介物に過ぎぬ。」(ibid., p.403.) かくて資本制生産における実現の意義は、全く無視されている。(註七) しかしこれらの点が、第三版「機械論」において著しく克服されることになるのである。

(註五) 「私は高い利潤より生ずる利益を大きく評價するが、労働者階級の犠牲において増大する高い利潤は望まない……我々が望むべきことは、價値の増大を伴わずして商品の分量が増加することである。」(Ricardo; Notes on Malthus, ed. by Hollander and Gregory, 1823, p.202; p.231) なお富=使用價値とみるリカードの主張は、Principles, p.381, p.377, 参照。

（註六）「或る生産物が賣れないのは、他の生産物が生産されないからであり、生産のみが生産物に対して販路を開く」（Say, J. B.; Letters to T. R. Malthus on Political Economy and Stagnation of Commerce by J. B. Say, 1936, p.3.）

(1) Heinrich, W.; a. a. O., S.8.; Smith; Wealth of Nations, Cannan's ed., Vol. I., p.165. 参照。

(2) Tougan-Baranowsky, Crises industrielles, p.195.; 鍵本訳、前掲書、一九六頁。

(3) Ricardo; Letters to T. R. Malthus, pp.97—99.

(4) Ricardo; Principles, Gonner's ed., 1925, p.387.

(5) 「剰余價値学説史」（マル・エン全集第十卷）三七二頁以下参照。

（註七）リカードが、実現の契機を無視して物々交換の見地に陷つている点については、Bucharin, N.; Der Imperialismus und die Akkumulation des Kapitals, S.13: Bauer, O.; Die Akkumulation des Kapitals, Neue Zeit 31, Jahrgang 1. Band Nr.23/24, 向坂逸郎訳「資本の蓄積と帝國主義」五頁。: Hirferding, R.; Das Finanzkapital, 林要訳、四八五頁等参照。尙かかる誤謬の中にも、過少消費説に立脚したマルサス、シスモンデイの看過した尊い眞理の萠芽を、即ち生産と生産との均衡＝生産部門間の均衡を强調したリカードの功績は認むべきである。（波多野鼎「景氣変動の必然性」経済学研究、第六卷、第一号、三七頁参照）

上述のリカード蓄積理論の骨格を図示すれば、次のようになるであろう。

資本の蓄積＝可変資本の蓄積＝生産的労働に対する需要の増大＝労賃所得の増大

生産的消費の増大＝供給（生産）の増大＝需要（消費）の増大

しかもリカードは、資本の蓄積を單に自然的に生産物の蓄積と考え、貨幣を單なるベールに過ぎないとみるのであるから、蓄積の結果愈々増大する商品の実現には何等の困難も伴わない。彼が、恐慌（general glut, over-production）を否定

し、従つて資本の過剰（glut of capital）を否定して無限の蓄積を謳歌したのも亦当然であろう。（ibid., p.403; pp.399—400, p.406）まことに「リカードとJ・ミルは、スミスより以上に資本蓄積の使徒であつた。」[6] 資本制生産における競争原理＝自動調節機能に対するリカードの盲目的信仰、従つて又資本制生産を絶対視する非歴史的観点が、如何に前述のドグマと密接に癒着しているかが分ると思う。（註八）

併し乍らリカードは、無限の蓄積を制約する資本制生産に本質的な一つの極めて重要なる契機を見落してはいなかつた。利潤率低下の傾向の主張が、それであつて、その論旨を要約すれば次の如くなる。（ibid., pp. 133—134）

資本の蓄積→労働需要の増大→労賃騰貴→人口増大（マルサスの人口法則）→食物需要の増大→劣等地耕作（地代法則）→食物価格の騰貴→地代の発生（騰貴）・貨幣労賃の騰貴・必需品価格の騰貴→利潤量の相対的減少→利潤量の絶対的減少→……→資本蓄積の停止（静止的社会 'Stationary State'）（註九）

→眞実労賃の下落

ここでリカードのいう利潤率とは、実際は剰余価値率のことである。総資本は、可変資本＝労賃にのみ解消され、これと剰余価値との割合が、利潤率とみなされている。[7] しかも利潤が減少するのは、蓄積資本が悉く労働の雇傭にのみ投ぜられ、「資本に比例してヨリ多くの労働者が雇傭される爲に労賃が騰貴する」（ibid., p.141）からだとリカードは説明するのである。尤も彼は、このような資本の増大に基く労賃の騰貴は、單に一時的現象に過ぎぬとして、労賃騰貴の、従つて又利潤量の絶対的減少の永続的原因を、彼の地代法則とマルサスの人口法則に、従つて結局自然的法則に過ぎぬ收穫逓減

のそれに求めている。「リカードは、利潤率低下の傾向なる現象そのものを正しく見た。併し彼は、これを土地の逓減的生産性によつて、自然法則的に説いた」[8]（傍点グロースマン）のである。

このようにリカードが、甚しく自然的見地に偏倚したのは、彼が技術的進歩を軽視した結果であることに注意しなければならない。勿論彼は、機械その他による農業上の改良が、穀價を低廉ならしめ、利潤を増大することを屢々重視し強調しはしたのであるが、やはりこの作用を「一時的」なものとみて、結局は土地の自然的生産性によつて制限されると考えたのである。（ibid., pp.70—71, p.194; p.116, p.134.）従つて若しも機械の改良発明が継続的大規模に行われる事実に想到し、そして又不変資本を軽視する致命的缺陷から脱脚することさえ出來たならば、彼の利潤率低下の理論は、根本的に変革されたことであろう。実のところリカードも、かかる変改を予想したかの如き章句を記している。「特に食物の輸入が自由な國においては」、又は「労働者の必需品を同じ容易さで増加しうる場合には、仮令資本がどれほど蓄積されようとも、利潤率又は労賃は、永久に不変であろう」と。（ibid., p.143, pp.398—399.）この言葉は、利潤率及び蓄積が機械や貿易等の社会的歴史的原因によつて左右されることを認めたものであつて、自然的絶対的見地に立つ上述の主張と対立する。ここにも第三版における発展の萠芽を、見出すことは出來ぬであろうか。

以上を要するに、リカードが、機械補償説を信じ、恐慌及び資本の過剰を否定し、更に利潤率低下の傾向を烱眼にも洞察し乍らもこれを正しく理論化することが出來なかつたのは、結局のところ、彼の價値論の缺陷に由來する不変資本を無視するドグマと、彼の自然的非歴史的見地とによつて禍された結果にほかなるまい。これら二つの重大なる禍根が、第三版

における修正及び改説によつて、如何に克服され、從つてその蓄積理論が、具体的にどのように発展せしめられるかということが、次に解明さるべき論点になる。

(6) Roll, Erich; A History of Economic Thought, 1938, p.201.

(7) 「剰余價値学説史」(マル・エン全集第九巻) 一三四頁。「資本論」(高畠訳、第三巻、上) 一八〇頁、二〇七頁参照。

(8) Grossman, H.; a. a. O., S.112.

(註八) まことに「生産資本の循環こそ、正統派経済学が、依つて以て産業資本の循環行程を考察する所の形態である。」(「資本論」第二巻、高畠訳、五八頁) 尤もマルサスは、商品の実現を重視し、「我々が、生産物を欲求し貨幣を欲求しないというのは、抽象的眞理である」(Malthus, T. R.; Principles, 1820, p.361.) として、恐慌の可能性を肯定している。(ibid., p.354.) この点に関する限りではリカードに優つている。併しマルサスの「主要目的は、不生産的消費者を擁護することにあつた。それ故にそれは歴史的には反動的であつた。」(Roll, E.; ibid., p.203.)

(註九) リカードは、蓄積に伴う利潤率の必然的下落の傾向を指摘して、蓄積は蓄積を妨げる傾向を有する事実を明かにした。ここには、「後に個人主義的理論の悲観的一派によつて、一般的過剰生産 (リカード自身は不可能と考えた) を証明する爲に利用された所の思想が、萠芽の狀態で見出される。」(Heinrich, W.; Grundlagen, S.8.) (尙同様な主張は、Bergman, E.; Geschichte, 豊崎、三谷訳、九五頁にもある。) またこの傾向を、スミスが社会発展の喜ぶべき指標と考えた (Smith, A.; Wealth of Notions, Cannan's ed., Vol. I, p.93.) のに反して、リカードは厳密な分解理論に立つて、スミスが矛盾を犯してまで樹立せんとした社会調和の思想を否定したことも重要である。

二　「原理」第三版における修正

(1)　「價値論」の修正

第三版における第一章價値論の修正は、何等新しい原理上の修正を意味するものではないにしても、本稿の論点に関連して次のような注目すべき改変を含んでいる。即ち初版において既に萠芽の形で用意されていた所の不変資本に関する正しき理解が、著しく進展せしめられたことである。リカードは「原理」第二版(一八一九年)の第一章第二節に附した「資本の蓄積は、前節で述べた原理に変更を來さない」という標題を、第三版では「商品に直接加えられた労働が、その價値を左右するのみならず、かかる労働を補助する器具、道具及び建物に投ぜられた労働も亦これを左右する」と改題して、價値形成過程における不変資本の役割を、明確に定式化したのである。これに加えて、固定資本の價値は、その物理的耐久力の大小に逆比例して、商品に移されるという説明を新たに挿入し、不変資本の價値移轉様式を解明した。(Ricardo; Principles, 3rd. ed., 1821, Gonner's ed., 1925, p.18, p.33.) 他方第三版の出た前年(一八二〇年)に書かれた"Notes on Malthus" の中では、恰もこれを裏書するかのように、「一般に蓄積された資本は、固定資本と流動資本との双方から成る」と述べ、数字を用いて固定資本(機械)の價値移轉の説明を試みている。[1] 既にここでは、既述の第二のドグマは、事実上否定されたものとみなしてよい。これを展開の環節として、第三版「機械論」におけるヨリ明確なる論述に到達することは、後にも述べる所である。次に可変資本及び不変資本なる範疇の認識に、リカードが一段と接近の歩を進めたことである。第三版では、

「労働を養うべき資本と、道具、機械及び建物に投下される資本」とに資本を区分し、その「結合の割合」を問題にしている。(ibid., p.24.) この事実は、彼が第二版において、流動・固定資本の区別は「本質的な区別ではない」と告白したことと共に (ibid., p.24.)、価値増殖の見地に立脚する可変・不変の資本分類についての理解が、一層深まつてきたことを示すものであろう。尤も以上指摘した何れの場合についても、原料の存在は依然として無視されている。かかる缺陥こそ既に第一項で述べた如く、彼の理論の展開にとつては最後の障碍となつており、従つて又「彼が猶ほ資本制生産方法の外的現象に囚われ、その内的機構を瞭かにするを得ずして、遂にその労働価値論に所謂修正を加えざるを得ざるに至りし最も重なる理由を成すものである。」[2] リカードのいう価値法則の修正とは、つまり彼が平均利潤率(彼はこの範疇の論理的成立過程を全く論証していない)の作用によつて惹起される価値と生産価格(彼のいう自然価格)との背離現象に当面して、この両者を混同・同一視したことから生じた価値論上の混乱にすぎない。混乱は、第三版に至つても続いているが、併し根本的な労働価値の原則については、彼の確信はいささかも動揺していない。(註一) 第三版では改めて語を追加し、第二章以下では修正されざる価値法則に基いて理論を展開すると、明言している。(ibid., p.30.)

(1) Ricardo; Notes on Malthus' "Principles of Political Economy", edited by J. H. Hollander and T. H. Gregory, 1923, pp.125—126.

(2) 森耕二郎、「リカアド価値論の研究」三二二頁。

(註一) 「私は價値を調節する原理について私の下した説明には満足していません。私はもつと有能な人が、この仕事を引受けてくれることを望んでいます。缺陥は、この理論が一切の難点を充分に解決し得ないという点にあるのではなく、この理論を説明せんとす

る人が、これを充分に説明し得ない点にあるのです。」(Ricardo; Letters of Ricardo to McCulloch, pp.47—48.)

(2) 「機械論」における改説

手工業者や博愛主義者達の機械に対する熱烈な反対にも拘らず、リカードは進歩的自由主義者の立場から、機械は「社会全体の利益になる」と主張して、機械使用の擁護に執心した。(ibid., p. 35, p. 377.) その論拠が、所謂「機械補償説」(Kompensationstheorie) にあつたことは、既に述べた所である。しかるに原理第三版の新章「機械論」において、この主張は、突如として変改されることになつた。「私は、機械を人間労働に代用することは、労働者階級の利益にとつて屢々極めて有害であることを悟るに至つた」と、リカードは告白している。(ibid., p.379.) ベルクマンのいう如く「自由主義経済学の最も卓越せる代表者が、技術的進歩の天福を無條件に讃美する傳統と絶縁して、ここでも経済生活の中に利害の対立を認めたことは、実際においても重大なことであつた。[1]」

既に指摘した如く、リカードが機械補償説を信ずるに至つた禍根は、何よりも不変資本を無視するドグマと、彼の絶対的自然的資本観にあつたことは疑いない。機械によつて排除された労働は、同時に遊離された流動資本＝必需品と必然的に結合して、新たな生産に充用されると彼は信じていた。リカードは、今やこの点の誤謬に氣付くに至つたのである。マカロツク宛の書簡(一八二一年六月一八日附)には次の様な彼の説明が見られる。「製造業者が流動資本を所有している場合、彼はそれによつて多数の労働者を雇傭しうる訳である。併し若しこの流動資本を、同價値の固定資本で代用することが、彼の目的に適しているならば、不可避的に彼の労働者の一部を解雇する必要が生ずるであろう。何故なら、固定資本は、そ

れがとつて代らんとする労働の全部を、使用し得ないからである」[2]と。そして「機械論」においては、右と全く同様な説明が、一層詳細に述べられているのである。(ibid., pp.379—381.) しかも既に初版において彼も認めている如く、「機械という無言の作業者は、仮令その貨幣価値の等しい場合でも、その機械によつて排除される労働よりも常に遙かに少い労働の産物である。」(ibid., 1817, pp.40—41.; 1821, Gonner's ed., p.35) 従つて「労働に対する需要は、必然的に減少し、人口は過剰となり、労働者階級は窮迫貧困の境遇に陥るであろう。」(ibid., Gonner's ed., p.381.) つまり解放された流動資本=労賃資本は、今や生産手段たる機械の購入に轉用され固定資本化されねばならぬこと、従つて労働を雇傭すべき労賃資本は減少し、過剰人口が必然的に発生すると説くのである。このことは明かに彼が不変資本たる生産手段への資本投下の必然性を認識したこと(これは第二のドグマの否定になる)、又「資本を其の一般的形態たる貨幣に於て概念し、流動資本を單なる生活資料と混同していない」[3]こと(自然的資本観の克服)、更に機械の採用という社会的歴史的原因によつて生ずる過剰人口を認識したこと(マルサスの自然的人口法則の否定)を示すものに外ならない。しかも右のような結論を、彼は「偏見や誤謬に基くものではなく、経済学の正しい原理に一致するものであり」(ibid., p.383.) 「幾何学上の眞理と同様の証明性をもつている」(註一)ものと断言している。こうして自由主義者達の牧歌的補償説の夢はリカード自身の手によつて完全に破碎されることになつたのである。(註二) 尤もこの着想は第三版に至つて突如として生れたものではなく「原理」初版と第三版との間に彼が書いた唯一の草稿たる"Notes on Malthus"の中にすでにその一端が現われている。即ち「労働に対する有效需要は、資本のうち労働の労賃が支拂われる部分の増大に依存しなければならない。」「若し資本

が機械に実現されるならば、より以上の分量の労働に対する需要は殆どないであろう。」[1]と。この事実こそ、初版における前述の萌芽と第三版における発展とを媒介する結節点となるものである。

(1) Bergman, E.; a. a. O., 豊崎、三谷訳、前掲書、九七頁。

(2) Ricardo; Letters of Ricardo to McCulloch, p.109.

(3) 舞田長五郎「リカードの機械論」経済学論集、第五卷、五九〇頁。

(4) Ricardo; Notes on Malthus, pp.124—125. ——だがここでは、過剰人口の発生の必然性についてはまだ述べられていない。

(註一)「正直に申上げますと、私には之等の眞理が、一切の幾何学上の眞理と同様の証明性をもつていると思われ、何故今まで長い間それらの点に氣付かなかつたかと自分で驚いています。」(Letters to McCulloch, p.109.) リカードは又「馬を人間に代用すること」によつても、同様な結果が生ずることを認めている。(Principles, pp. 385—386.)

(註二) 夢破られたマカロックの驚愕と憤激!! (Letters to McCulloch, pp.105—105; Letters to Malthus, p.184. 参照) だが後に彼はリカードの主張を事実上認めるに至つた。(McCulloch; Principles, 1825, p.165; Letters to Malthus, p.184. 参照) ところが、マルサスは依然として補償説に固執した。「固定資本の採用が……労働に対する有効需要を減少せしめるといつた恐れは殆どない」という初版における主張 (Malthus; Principles, 1820, p.264.) を第二版(一八六三年)においても変えていない。(Grundsätze der politischen Ökonomie, übersetzt von V.Marinoff, 1910, S.321. 二版の独訳)

三 「原理」第三版を契機とするリカード蓄積理論の發展

第三版における價値論及び機械論の修正或いは改説等を通じて、リカードの蓄積理論は如何なる発展と変貌を遂げるに

至つたか。

先づ注目しなければならぬ発展は、資本制生産の本質に対する理解が一層深められ、社会的歴史的見地が著しく前面に押し出されて來たことである。例えば、「機械論」に現われる生産者は、最早や初版に見られた様な独立生産者的性格のものではなく、使用價値の生産を利潤獲得のための單なる手段として行う資本家的生産者となつている。(註一)初版では機械は使用價値を豊富に齎し「一般的幸福を増大する」が故に、「仮令部分的損失を生じても」不可避的に採用されると主張した (Principles, 1817, p.375.) のに反して、「機械論」では「機械が純生産物を増大する限り、仮令総生産物の数量や價値を……屢々減少するにしても」(ibid., 1821, Gonner's ed., p.383.)、又仮令國家が機械の採用を如何に阻止しようとも (ibid., p.388.)、不可避的に採用されざるをえないと述べている。この場合機械は、單に物としての生産手段ではなくて、むしろ價値の増殖を生産の動機とする特定の社会的関係の視点から資本としてみられている。(註二)しかもリカードが、補償説否定の論拠として用いた流動資本の固定資本化の過程を述べるに際して、貨幣資本を問題としていることについては既に述べた。これらの事実は資本を單に素材の形で考え、貨幣をベールとみて來たこれまでの見解と較べて、明かに目ざましい前進である。

こうして歴史的社会的見地において深められてきた理解は、更にリカードが過剰人口に関して述べた主張においても認められる。彼はベートンの説に賛同して機械化に基く労働需要の減少を承認したばかりでなく、それに一歩を進めてかかる歴史的社会的原因に因る過剰人口の発生の必然を結論している。しかもその際「純收入を増大すると同じ原因が、同時

に人口を過剰ならしめ、労働者の境遇を悪化すること」(ibid., p.379.)を論証したのである。[1] またリカードは、資本制生産の下における労働者階級の社会的地位についても、鋭い洞察と批判とを示している。即ち彼は單に機械が労働者階級を失業に追やり、彼等を「窮迫貧困の境遇」に陷らしめることを認めたのみならず(ibid., p.379, p.381, p.386.)、過剰人口が、就業労働者に対して「就業競争をするために、労賃の價値を下落せしめ、労働者階級の狀態を著しく悪化せしめる」(ibid., p.385.)ことを明かにし、而も機械によつて一度資本から駆逐されるに至つた労働は、決して永久に資本から解放された訳ではなく、蓄積の進展と共にやがて再び資本の下に生産的労働としてか、或いは又單なる僕婢としてか、雇傭されることを指摘している。(註三) このことは、彼が労働者階級の窮狀に深き同情を抱き乍らも如何なる慈善的救貧政策にも強硬に反対し、労働問題を自然法則化し絶対化した所の初版における立場とは違つて、今や「特定の歴史的社会的問題」[2]として把握するに至つたことを示している。「原理」第三版に続いて現われた「農業保護論」(一八二二年)においては、更に資本制生産を特定の歴史的生産形態として認識しようとする次のような注目すべき主張がある。「吾々が若しオーエン氏の平行四辺形の一つに住み、吾々の総生産物を共同で享樂するとするならば、何人も過剰の結果に苦しむ筈がない。しかし社会が現在の如く構成されている限り、過剰は生産者に対して屢々有害であり、稀少は有利であろう」[3]と。

(註一) 「若し純所得が減少しないならば、総所得の價値が三千磅であろうと一万磅であろうと、或いは一万五千磅であろうとも、資本家にとつて果してどれだけの重要性があるであろうか?」(Principles, p.381.)

(註二) 「機械は資本となる」(Notes on Malthus, p.124.) これを初版の序文中の「労働と機械と資本との結合された適用……」にお

ける資本の認識と比較せよ。尙 Letters to Malthus p.95. を參照。即ち、これらの場合には「『機械』は資本と異る範疇に置かれている。」(Lewinski; Founders of Political Economy, p.131.)

(1) 「剩余價値学說史」(マル・エン全集第十卷) 三九七・三八〇頁參照。

(註三) 「資本が增大すると共に、資本家は、より多くの労働者を雇傭するであろう。故に第一次に職を奪われた人々の一部分は、後に至つて雇傭されるであろう。」(Principles, p.381; c.f. p.384; p.387—388.) この点「正統学派の体系は、人口原理を削除したとしても、現在あるがままに留つたであろう」というシュムペーターの見解ほど不当な評價はない。(Schumpeter, J.; Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte, Grundriss der Sozialökonomik, Bd. I., 1914, S.77.)

(2) 舞出長五郎、前揭書、五九〇頁。

(3) Ricardo; On Protection to Agriculture, 1822, Ricardo's Economic Essays, Gonner's ed., 1923, p.210.

次に最も注目すべき発展としては、補償說の否定に関連して、前述の如き宿命的なドグマの一角が、遂に克服されるに至つたことである。リカードは、流動資本が固定資本化されねばならぬ事実に氣付くことによつて、現実の蓄積過程の中に、「貯蓄された資本を、以前よりもヨリ大なる割合で機械の使用に投ぜしめる傾向」(ibid., p.386.) のあることを発見した。機械採用の結果利潤は必然的に增大し、又商品は低廉となつて節約は增進する。資本の蓄積も著しく促進せしめられることは、いうまでもない。(註四) しかし乍らかかる「資本の增大と共に、常に資本のヨリ大なる割合が機械に使用されることになる。労働に対する需要は、資本の增大につれて引続き增加するであろうが、併し資本の增大には比例しないであろう。その增加率は必然的に一つの逓減的比率であろう。」從つて「技術が進歩し、文明が普及するにつれて、固定資本は流

動資本に対して益々大なる割合を占めるようになる。」(ibid., p 387, cf. foot-note) かくて凡ゆる資本の蓄積は、労賃資本の蓄積を意味し、蓄積された資本は悉く労働の需要にのみ投ぜられるという重大なる第二のドグマは、ここに完全に否定されることになつたのである。それと同時に、資本によつて生産的に消費される生産手段と、收入によつて個人的に消費される消費資料とへの生産物の区分、即ち再生産論にとつて不可缺な基礎的概念が、改めて明確に認識されるに至つた。リカードはいう。「若し資本が機械に実現されるならば、増大せる労働量に対する需要は殆どないであろう。——若し資本が労働に対する追加需要を創造するならば、資本は必然的に労働者によつて消費される諸商品に実現されるであろう」と。(註五)

こうしてリカードの蓄積理論は、第三版に至つて注目すべき発展を遂げるに至つた。併し他方では、初版に示された幾多の誤謬や缺陥は依然改変されず、そのまま保存されてもいたのである。結果として第三版における蓄積理論は、多くの発展を含むことによつて却つてその矛盾と混乱を一層増大し且つ尖鋭化することになつた。

第一に、第三版で擡頭して來た社会的歴史的観点が、初版から継承している自然的絶対的観点と対立する。例えば機械化に因る過剰人口の必然的発生を主張して事実上マルサスの自然的人口法則を否定しているにも拘らず、一方ではこの人口法則の基礎をなす所の收穫逓減の自然法則に依然として固執している。機械の採用による利潤の必然的増大から機械化の不可避性を説き乍ら、他方では食物が騰貴し、労賃が昂騰するから機械が採用されると説いている。(ibid.,p.386.) 或いは機械の生産力を強調し乍ら、而も機械化のために総生産物が減少することも可能であると主張し、更に資本を事実上

貨幣形態において把握したにも拘らず、未だ総生産物＝消費資料＝資本と考え、以て総生産物の減少によつて過剰人口の必然的発生を結論し、生産物と労働との直接的必然的結合の立場にとらわれている。(ibid., pp.381—382, p.379, p.383.)尤も之等の矛盾は、一面には当時の特殊事情及び現実の未成熟の反映でもあることは否定出來ない。(註六)

第二に、次の如き矛盾を指摘しなければならない。即ち第二のドグマの克服にも拘らず、その他のドグマが依然として保存されている事実である。リカードは、投下固定資本の逓増傾向を発見し、不変資本の商品價値組成への参加を確認し、更に生産物の正しい理論的区別に想到したにも拘らず、これを明確な概念と理論とへ完全に仕上げることが出來なかつた。商品價値を依然として收入にのみ分解し、総生産物を消費資料にのみ還元している。(註七)(ibid., pp.381—382.)

最后に特に注目すべき顯著な矛盾は、「機械論」において堂々と克服された筈の第二のドグマが、事もあろうに同じ第三版の別の箇所で、改めて確認されたことである。リカードは「原理」第八章「租稅論」の頭初にある生産的消費と不生産的消費に関する説述に、第三版で新たに次の如き脚註を附した。「一國の生産物は総て消費される。併しそれが別の價値(another value)を再生産する者によつて消費されるのと、再生産しない者によつて消費されるのとでは、想像し得る最大の相違がある……資本に加えられたといわれる收入部分は、不生産的労働者によつてではなく生産的労働者によつて消費される……」と。これは余りにも甚しい矛盾である。併しこのような撞着の中にも、リカードの本能ともいうべき優れた理論的直覚を看取すべきではなかろうか。甚しこの矛盾は、資本主義的蓄積における現実そのものの矛盾の反映に外ならないからである。價値増殖を至上命命とする資本制蓄積は、一方において投下不変資本の逓増、資本の有機的構成の

高度化を手段として労働を節約し排除すると共に、他方では剰余の價値を創造する生産的労働を可能な限り多量に資本の下に吸收しなければならない。「一國の繁栄と幸福に貢献すること、高き利潤に如くものなし」[4]とまで叫んだリカードは、機械化による利潤の増大を強調するときには不変資本の意義を認め乍ら他方、生産的労働の雇傭によつてのみ「別の價値」即ち利潤の獲得が可能であることを強調するときには、さきに認めた不変資本の意義を忘れている。（第一項九八頁参照）しかもこの二つの主張が、全く矛盾することにすら、彼は少しも氣付いていない。かかる矛盾は結局、労働の二重性に関する認識の缺如によつて生じた所の、流動・固定資本の分類と可変・不変資本の区別との混同に由來するものである。このような資本範疇の混同が、リカードにとつては、スミスより以上に甚しく邪魔になつていることが、分るであろう。[5]

（註四）「機械の採用の結果たる價格の下落は、……資本家の貯蓄手段――收入を移して資本とする便宜――を必然的に増加する」(Principles, p.381.) 又機械の使用は、「一國の純生産物を常に増大する」(ibid., p.383.) のみならず、機械を人に先んじて採用する場合には、追加利潤 (additional advantage) も獲られる。従つて「機械の改良の結果たる商品を以て測つた純所得の増加は、常に新たなる節約と蓄積に導くであろう。」(ibid., p.387.)

（註五）Ricardo; Notes on Malthus, p.125. 又「原理」の中では、個人的消費も亦「異つた生産物に実現される」こと、即ち「收入が美麗な衣服、高價な家具等に実現される」場合と、「食物衣服に実現される」場合とを、即ち奢侈品と必需品に実現されることを、指摘している。(Principles; p.384.)

（註六）大陸封鎖による自給体制、従つて劣等地耕作及び穀物條例の惡用に因る穀價の暴騰という特殊事情。(Lewinski; "Founders", p.131, p.142; Cannan; History of Theories, p.150.) 又リカードが、資本家を「親方」(Master)、労働者を「職人」(Man,

Workman) と屢々呼んでいる事実。(Notes on Malthus; p.162, p.166, p.201, p.202, etc.; Letters to Trower; p.158. etc.) 徒弟條例の廃止は一八一四年のことであり、大規模機械制生産の採用は紡績業等の少数の産業に限られ、周期的な一般恐慌は一八二五年に始つたに過ぎぬこと。従つてリカードを「機械制大工業の経済学者」(戸田武雄「機械の経済学」四二頁)と呼ぶのはどうであろうか。これらの現実そのものの未成熟に因りリカード蓄積理論の矛盾や欠陥が制約されていることにも、注意しなければならない。

(註七) 「殆ど凡ての商品の價値は、労働と利潤とから構成される。」(Letters to McCulloch, p.154. 一八二三年八月三日附書簡)

(4) Ricardo; On Protection to Agriculture, Essays, Gonner's ed., p.281.

(5) 「資本論」第二巻、高畠訳、一八〇—一八三頁参照。

このような矛盾や撞着にも拘らず、リカード蓄積理論の学説史上もつ意義を、不当に評價することは許されない。彼自身も述べているように、リカードは、「機械論」において「未だ曾て確実な又は満足な結果に導くような方法で研究されたことのない」「極めて重要な問題」(ibid., p.377) を学説史上初めて提起したのである。マルサスやマカロックの激しい反撃を受け乍らも、敢然として機械補償説を否定し、機械の資本制的充用の意義と機械制生産下の労働問題とに関して優れた見解を示し、以て資本制蓄積の基本的性格を解明したことは、何んといつてもリカードの偉大な功績といわなければならない。[6] 併しそれにもまして重要な貢献は、前述の第二のドグマの克服にあるとみるべきである。リカードは蓄積理論の分野において、アダム・スミスの單なるエピゴーネンでは決してなかつた。何故なら、彼がスミスを乗り越えて認識するに至つた投下不変資本の逓増なる事実こそ、資本制蓄積の核心を形成する最大の要因となるものであるから。スミ

スによつて創始され、凡ゆる古典派経済学者達によつて絶対自明の眞理として盲信されてきた宿命的な不変資本軽視の思想が、リカードによつて初めてここに一部克服せられるに至つた。このことは、古典派蓄積理論の頂点を意味すると同時に、又それ自らの止揚にほかならない。

このようなリカード蓄積理論の発展、即ち社会的歴史的観点への前進及び第二のドグマの克服は、決して偶然に齎らされたものではないように思う。然るにリカードが第三版に至つて突如として補償説を否定した原因については、殆んど凡ての論者がこれを疑問に思つている。その多くは、時代の反映としてか、或いは文献の上からはバートンの著書による影響として理解しているに止る。(註八)確かに「ウオーターローは英國の煙突の林立せる工場において勝つた」といわれる程の急激なる産業の発達、及び当時廣汎に展開された機械破壊運動(Ludditen Bewegungen)などの現実に刺戟されたことは疑いないし、また理論的には彼がバートンの著作から引用している事実に徴しても、その影響が明かに察知される。併しそうした外部的原因のほかに、既に初版に内包され、後に理論自身の必然に基いて展開された内部的要因の意義をも看過してはならぬであろう。萠芽が外部的要因に接触するときに突如として展開する。かかる理論展開の内部的要因の解明が、これまで殆ど試みられていないということは、遺憾至極のことである。われわれは「原理」初版の中にかかる萠芽を求め、この萠芽、即ち價値形成過程における不変資本の機能についてのリカードの優れた認識が、「マルサス評註」における過渡的認識の形態を経て、第三版に至つて如何に発展するに至つたかを、上に追求して來たのである。

「リカードは、何か虚偽の賞讃を必要とするには余りにも偉大な人物である。彼の功績は、彼が経済学者としての眞実

の歴史的地位に置かれることによつてのみ顯揚されるであろう」[7]とパッテンは述べている。併し「リカードの原理は、経済学の最も難解な著書である。之を理解することすら既に容易ではなく、之を解釈することは更に難しく、之を評價することは最も難しい」[8]とはシュムペーターの言である。固より筆者も本稿の如き小論において、リカードの蓄積理論を正当に評價し得たとは思つていない。ただ本稿は、特に第三版「機械論」の重大なる意義を指摘することによつて、蓄積論史上余りにも不当な評價を受けているリカードの「眞実の歴史的地位」を「評價」せんとした一試論に止る。とわいえ、上述の如く、リカードを以てアダム・スミスの單なる亞流とみなす多くの論者は、蓄積論史上「機械論」のもつ劃期的意義を、一様に看過しているのである。かくも重要なるリカードの「機械論」をして、「謬れる解釈者の樂しき狩猟場」[9]たらしめてはならない。

（一九五〇・二・二四）

(6) 森耕二郎「労賃学説の史的発展」二〇〇頁参照。

（註八）例えば、Diehl, K.; Erläuterungen zu Ricardo's Grundgesetzen, II. S.425. 参照。舞出教授（前掲書、六〇〇頁）、小泉教授（「リカアドオ研究」四九一頁）共に、デイールのこの主張を引用されている。舞出教授は、特に当時の「現実」による影響を力説せられている。

(7) Simon N. Patten; Interpretation of Ricard, Quarterly Journal of Economics, Vol. VII, 1893, p.322.

(8) Schumpeter, J.; Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte, S.59.

(9) Cannan, E.; Theories of Production and Distribution, p.388.